

朝鮮・韓国らしさ

周辺国の狭間で“事大”と“前権力否定”に揺れる
～「善か悪か」の二元論儒教国家～

坂下 富

はじめに

20年ほど前の韓国旅行で感じた違和感、そして現在の韓国の反日世論に、なぜ、どうしてという問いを持っている。この機会にその問いにいくらかでも解を見つけたいと考える。

旅行は教職員の団体で貸切バス1台30人余。「あの〇〇寺の山が禿げ山なのは、豊臣秀吉軍が焼いたからです」というガイド、食事に伝統の陶磁器を使わず、金属（アルマイト？）の皿を出す、繁華街でタクシーを求めるが止まってくれず、我々を見るソウル市民の目。そこには、韓国旅行の前後に同じ団体で行った中国とはちがう、冷ややかさ感じた。

最近、日本から見える韓国の景色は、竹島、従軍慰安婦、明治の世界遺産登録、中国での対日戦勝記念式参加など、対日批判（嫌日・反日）の嵐の感がある。

【写真】3年半ぶりの日韓トップ会談 ソウルで開催



日韓首脳会談に、韓国と日本の歴史の重荷がのしかかっている。そのキーワードは・・・分断国家、儒教の束縛、半万年の歴史観と韓国人の誇りと恨み感情、日韓併合と日韓基本条約、事大主義など韓国・朴大統領の“らしさ”がちりばめられている。

対する日本・安倍首相は、過去の歴史的負い目のトゲに加え、朝鮮半島人（韓国・北朝鮮）の“らしさ”を読み切れず、“慰安婦”の交渉＝蒸し返しの失敗にこりて、前進も後退も出来ないエアポケットに入っている。

この会談の陰の主役ともいえる北朝鮮は、核やミサイル開発で力を誇示し、日本との拉致問題解決の約束を引き延ばしている。その背後には未解決の戦後賠償がある。

環日本海の隣国、朝鮮半島の“らしさ”をさぐり、韓国・北朝鮮の国とその国の人々をい
くらかでも理解できればと考える。

主な参考資料

- 『書名(略号)』『書名』(著者) 出版社 [著者略歴等]
- 『恥韓論』・・「韓国人による恥韓論」(シンシアリー) 扶桑社 [韓国生まれ・韓国育ちの
歯科医師。韓国の反日思想に疑問を持ちブログは日本に愛読者多い]
- 『黒韓史』・・「韓国人が暴く黒韓歴」(シンシアリー) 扶桑社 [同上]
- 『韓国高校歴史』・・「韓国の高校歴史教科書」(三橋広夫・訳) 明石書店 [千葉市立中学校
教諭。『これならわかるベトナム Q&A』などの著作も]
- 『朝鮮史』・・「朝鮮の歴史」(朝鮮史研究会・編) 三省堂 [1974年の旧版を94年に全面的
に書きかえ出版。会長は宮田節子]
- 『韓国の歴史』・・「韓国の歴史」(金両基編著) 明石書店 [哲学博士・評論家・比較文学者。
他に小幡倫裕など4人の著者]
- 『恨韓論』・・「恨韓論」(黄文雄) 宝島社 [台湾生まれ。早稲田大学卒。「日本人はなぜこ
れほどまで中国人、韓国人と違うのか」等の著作多数]
- 『反日・韓国』・・「反日やめたら成り立たない国・韓国」(呉善花・石平対談書) ワック [呉
＝韓国済州島生まれ、来日し東大大学院卒。拓殖大国際学部教授。石＝中国
四川省生まれ、北京大学卒。日本に帰化、評論家]
- 『大統領殺す国』・・「大統領を殺す国韓国」(辺真一) KADOKAWA [東京生まれ、新聞記
者を経て、『コリア・レポート』を創刊。テレビ、ラジオなどで評論活動]
- 『隣の国で考えた』・・「隣の国で考えたこと」(岡崎久彦) 中公新書 [1930年生まれ。駐韓
大使を務めたことから『隣の..』を著し、著作多数]

〔I〕朝鮮らしさの背景

朝鮮半島と朝鮮の人々のらしさ形成の大きな背景として以下のA~Dの4点を指摘したい。

A) 周辺国の脅威が絶えない……

半島国家朝鮮は、高句麗・百濟・新羅の三国時代などのように分断国家の時代が大半で、
統一国家の時代は高麗・李氏朝鮮の1000年くらいである。その間、相互抗争に加え外部の
中華、北方の諸民族、南の倭(日本)の侵攻などに苦しむことが多かった。

『反日・韓国』で「2000年の中で1000回以上に及ぶ侵略に脅かされ……だから、(韓国
人は)他人や他民族を心から信じない」と呉善花氏は語っている。

B) 分断国家・地域抗争

分断国家……

中華の大国や契丹・女真族の圧迫、南の倭の侵攻に加え、半島内の隣国との対立など、
半島国朝鮮は周辺から絶えず脅威にさらされていた。

新羅が唐と結び百済と高句麗を滅ぼし初の統一国家を実現(676～)。しかしまもなく高句麗の跡をつぐ「渤海」が北、新羅が南を支配し、その新羅も三国に分かれ四国分断を余儀なくされ、統一国家は長くは続かなかった。

朝鮮では地域、党派、朋党、儒教の学派、階層など多方面での対立そして人々の間対立、分断が激しい。このことが国の分立を引き起こす大きな要因となった。

高麗と李氏朝鮮は、半島では珍しい統一国家であった。第二次大戦後に東西対立の下、分断国家であったドイツもベトナムも統一を見たが、朝鮮半島は戦後 70 年を経過しても韓国・北朝鮮に分断したままである。両国は時には激しく対立し、時には融和的な態度を示して“低度な”緊張関係を持ちながら並立している。これは背後で支えているアメリカと中国にとっても並立解消を望まない意図があり、その大国に依存し、事大する韓国も北朝鮮も半島の伝統ともいえる“分断国家”を 21 世紀の現代でも示している。

現代の韓国では、地域間の対立感情が極めて強いことでも知られる。

地域抗争……

「韓国人の差別意識は上下だけではない。地方差別も根強いものがある。1460 年代作成の『経国大典』という基本法典に『北方の咸鏡道、平安道、黄海道の者は官吏はもちろん、鷹匠への起用も禁止』の条例まである。今も平安道人は平安道奴、西漢・などと呼ばれ、無視され、咸鏡道人は水売り、咸鏡ネギなどの蔑称を与えられている」

「古代から南の三韓地域は三北（高句麗などの地域）に比べて経済的に豊かだった。李氏朝鮮時代になると北地方は南からの差別意識は固定化された。京城の人は絶対に三北人とは結婚しなかった。……『恨韓論』

国民の選挙で選ばれた韓国の大統領（初代の李承晩は“北”の出身）8 人の内、昔の“新羅”地域（慶尚道）が 7 人、あとの 1 人は金大中以唯一“百済”地域（全羅道）出身。『大統領を殺す国』は「金大中は何よりもまず野心家。韓国国内でも長く冷遇されていた全羅道の期待を一身に背負った人物だった」と、地域差別と抗争を示している。

C) 誇りと恨み心……

「半万年の歴史文化」を誇り、その一方では中華に「千年属国」となり、しかも中華周辺の諸民族遼・金・元・清・日本が、中国に王朝を建てたり侵攻したのに、朝鮮は一度もしていないし、世界的に誇れる大きな歴史的実績も乏しい。

朝鮮は王を名乗らされ、“皇帝”を名乗ることが許されなかった。日本は早くから一貫した“天皇”の称した。その朝鮮で初めて皇帝を名乗れたのは、日清戦争での下関条約で、清が朝鮮の独立を認めたからであり、その結果が韓国人の大いなる対日コンプレックスの源として『恥韓論』は次のように記述している。

・「皇」コンプレックス。長らく「皇」になれなかったコンプレックス。見下していた日本のおかげで「皇」になれたコンプレックス。その日本に併合されたコンプレックス。大嫌いな弟の日本に今でも「皇」が存在しているコンプレックス。簡単にいえば「兄より偉い弟への劣等感なのです。」

このコンプレックスのためか、『恨韓論』にも、漢字も漢方もサッカーも、寿司も相撲も・・・韓国で生まれ、孔子も卑弥呼も・・・韓国人だった、というウラナリ（我が国）自慢が現代韓国で（以前の朝鮮にも）満ちあふれているという。

『恥韓論』では、「大した根拠もなく、剣道、桜、茶道、忍者に至るまで、何でも韓国が起源だとする。（略）韓国の近代文明のほぼすべては併合時代に日本から入ってきたという、韓国としては認めたくない現実に対し、兄として最後の抵抗をしているのかもしれない」と韓国の人々の日本を猛烈に意識する心を紹介している。

以下は、『恥韓論』の著者が、歯科医師として予備役兵士としての民防衛教育という国の軍事訓練を受けた（その教科書にも書かれていた）体験談。

- ・「韓国はすばらしい」を聴衆（医師など）に納得させるための教材は、京釜高速道路、オリンピックでの順位、キム・ヨナ、世界一の空港、韓流。

- ・歴史的事実の檀君が神話扱いとなったのは、日帝が韓国の歴史を日本より短くさせるため檀君関連書籍2万冊を日帝が燃やした。

- ・韓国の国花のムクゲをトイレの周囲に集中的に植えてしかもすぐ死ぬように管理することを（日帝は）教えた。

- ・ほかにもワンパターンで「良い物」と「悪い物」を選別し、良い物だけを見せて、韓国に誇りを持てと、悪い物は全て日帝のせいで、韓国の責任ではない、と講師は説いた。

歴史的コンプレックスに加え、両班から賤民に至るきびしい身分・階層制度（現代なお大きな影響力をもっている）と儒教思想の桎梏のなかでのフラストレーションが、恨み心、嫉妬、ねたみとなって激高的行動にでるのではないか。日本を恨み、「反日」となるのは、「世界一賢いのは我々」と考え、アジアの中心は韓国と考える韓国人の多くが持っている主張で願望とされる。

さらに「中国は父、韓国は兄、日本は弟」とするのが韓国（朝鮮）の人々の小中華思想で、「儒教思想では子は父に、弟は兄に逆らえない」と日本を見下す、小中華思想も根底にある。その小中華思想の由来を『朝鮮史』は次のように記述する。

- ・女真族および清を野蛮国と見なしていた朝鮮の知識人は、明が清に滅ぼされると、清が支配する中国はもはや文明国ではないとし、朝鮮のみが中華文明の継承者だとした。

- ・李氏朝鮮の孝宗政権では、清を攻撃する北伐計画が立てられたが、実際は実行されなかった。が、北伐思想は継続され、野蛮な清から学ぶものはないという意識もうまれた。

巨大な女真＝清をも見下す、小中華思想は日本にも向けられる。「なのに、日本は我々に何をしてきたのか！」との感情が根底にあり、それを誘導する韓国の憲法の規定や政策もあるが、後に詳述する「前政権を否定する」朝鮮らしさの象徴的事例といえる。現代の大韓民国の前政権は「日帝」なのだ。

D)両班と身分制・・・

- ・両班は文班と武班という官僚の総称で貴族と共に政治の中枢を担い、高麗時代にはじまりやがて科挙などにより官僚になれる階層となった。この両班を頂点に中人、常民、賤民の

四階級で構成。武班は有名無実化するが、文班は中央政界を牛耳ることが多かった。両班階層は各地域でも有力者として大きな影響力や支配的地位を占めた。

李氏朝鮮時代、壬申の倭乱（豊臣政権の侵攻）以後財源不足になると、権力者が貴族や両班身分を売り（告身・職帖）、賤民などの身分解放（免賤帖）も米や金銭で行い、賤民から常民へ、常民から両班への身分上昇が起きた……『朝鮮史』

『反日・韓国』で「李朝末期には国民の半分が両班になった。両班は汗を流してはいけません。汗水を流すことはみっともないことであり、働いた瞬間、周りから蔑視されます。畑に行って働くわけにはいかない」と呉善花氏は語っている。

「両班は水に溺れてもじたばたしない」という諺があり、この両班階級の面子を大事にする気風が、今の韓国の国民性に深く根を下ろしているとされる。

階層・門閥の呪縛……

両班を筆頭とする身分制が定着したのは李氏朝鮮時代とされる。『恨韓論』は次のように書いている。

・李氏朝鮮は上部構造は儒教的でも、下部構造はインドのカースト制以上に頑迷な階級社会であった。

・国王を頂点に、王族・両班・中人・常人・賤民のヒエラルキーができ、賤民は奴隷・職業的賤民（奴婢・皮工・医者など）・白丁があり、賤民の中でも最下層とされた。

・朝鮮人の差別意識は古代から牢固なもので、上から下へ下はその下へ差別していく。今でも韓国のビジネスマンは外国へ行くと、まず相手が上か下かではかる。

・日帝時代に、日本は階級解放運動をすすめ、リンカーン以上の「奴隷解放」をした。安重根や李承晩ら両班が反日の急先鋒となったのは、特権の喪失を恐れたためである。

「生まれつきで決まってしまう制限……“超えられない序列”である血統というものは“偉い人の子は偉い”という意味でもあるため、いつまで時間が経っても、偉い人はいつまでも尊く、卑賤な人はいつまでも卑賤。（略）“ダメな人の子はダメ”“罪人の子は罪人”という歪んだ考え方が根強く残っている」……『黒韓史』

北朝鮮という国家

第二次世界大戦後の東西冷戦で生まれた分断国家で現存も続くのは、北朝鮮と韓国、中国と台湾である。韓国には前々から二つの敵が存在し、一つは日本、もう一つは北朝鮮だったと『恥韓論』は以下のことを書いている。

・日本が「反日思想」、北朝鮮は「反共」として国民の意識の中に拡大。1990年代の反日は「克日」に近いもので、頑張れば10年後には嫌いな日本勝てるよ！ に近かった。反共は強力で、小学生たちが弁当を食べる前に「たたき取ろう（たたき殺そう）金日成！ 金正日もたたき取ろう！」と叫んだ。

・反共が韓国の「忠」そのものだった。韓国がもっとも高い徳目とする忠孝の忠だ。

現代の北朝鮮について『反日・韓国』は以下のように書いている。

・韓国では北朝鮮のチュチェ思想の本は発禁で、チュチェ思想という言葉が印刷されて

いる本ですら持てなかった。北朝鮮の思想の根源にあるチュチェ思想は朝鮮半島の人々にぴったりの考え方で、儒学の朱子学を磨いたもので、韓国人には心情的によくわかる話。

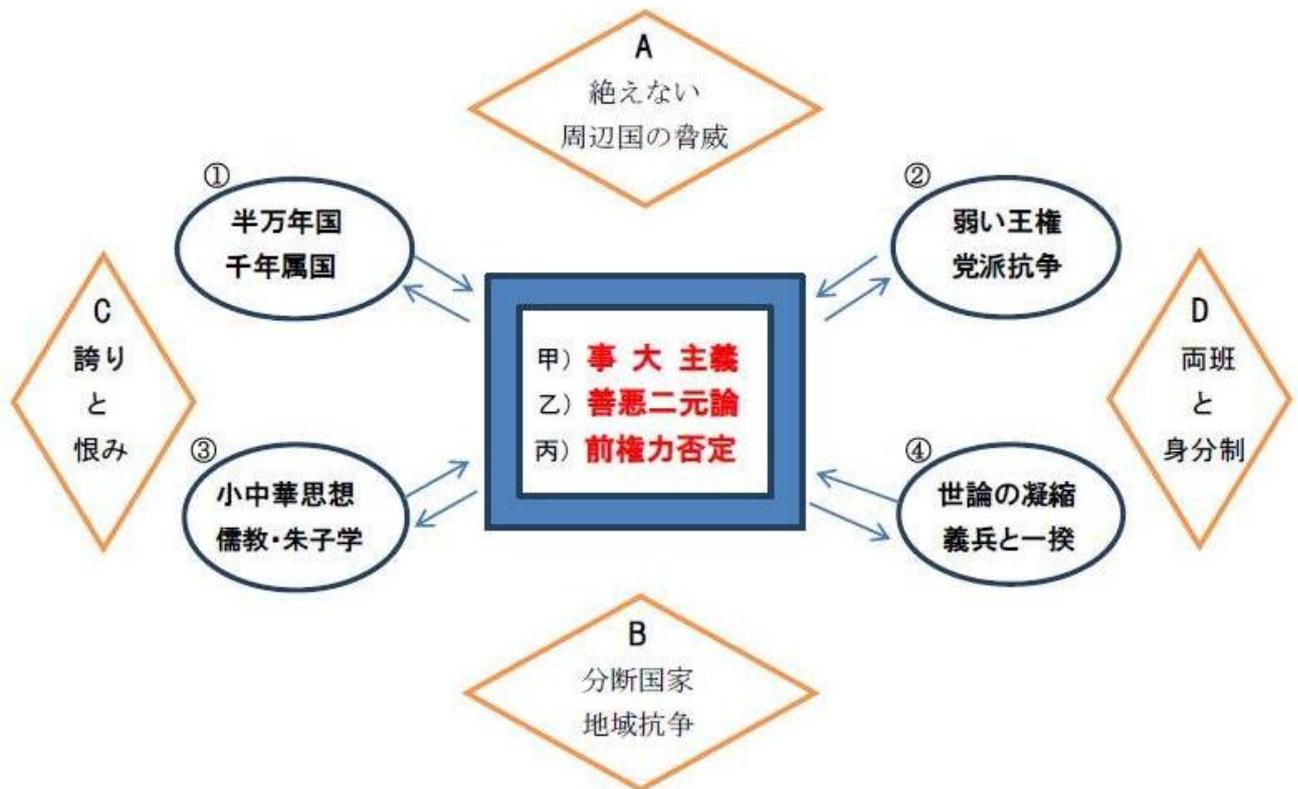
・チュチェ思想は「主体思想」で、「チュチェ」はわが国、わが民族の主体性を持つことで、どこへ行こうと、民族の伝統の主体性を持って生きるべきという考え方。その根源にあるのは血筋。どこの国に移住しても血を汚してはいけない。他の国の人とは結婚してはいけない。これは単一民族国家としての民族優越意識。

・北朝鮮がとんでもなく貧困な国で、韓国の方がましだとしても、精神的にどちらがいかと韓国の若者は思ってしまう。

・北朝鮮の経済が不振でも、2000万人の国民が食べることができれば崩壊しない。大凶作で食糧がなくなれば、中国が援助し、絶対崩壊させないし、南北統一もあり得ない。

・その中国の心情を知っているから北朝鮮は、平気で貶めるし、平気で馬鹿にする。俺が潰れたらあんたが困る、と考えている。

「韓国は昔のように中華帝国の属国になる道を進んでいます。その点で、北朝鮮は韓国より頭が冴えている。北朝鮮は中国に依存しているし、援助ならいくらでももらう。しかし、絶対に中国の言いなりにはならない。むしろ中国に対して挑発的態度を取ります。したたかですよ」……『反日・韓国』



* 図中の①やA、甲などの記号は本文の項目に一致する

《概念》 朝鮮・韓国らしさ・・・事大主義・善悪二元論・前権力否定

〔Ⅱ〕朝鮮らしさの原因

①半万年国で千年属国

中華 4000 年に対し、朝鮮は半万年すなわち 5000 年の歴史があると対抗意識をもち主張する。中国東北部から半島を勢力範囲とする古朝鮮は「檀君王儉が建国（紀元前 2333）」「遼寧地方を中心に成長して次第に隣接する族長集団を統合」と『韓国高校歴史』は記す。これは伝承・伝説であり、これをもとに「半万年」の歴史を持つ国と自負する。

その間、朝鮮では高句麗・百濟・新羅の三国時代や現在の韓国と北朝鮮などいくつかの国家に分断して、対立抗争する時代がきわめて長い。

本格的統一国家は、高句麗が高麗 918～を建て、それを滅ぼした李氏朝鮮 1392～大韓帝国 1910～の 3 国のみのはぼ 1000 年。統一王朝は唐・遼・金・モンゴル（元）・明・清などの圧迫と直接間接の支配を受け続けた。ところが日韓併合により未だなかった国を失うという直接支配を日本から受けることになった（1910～1945）。

三国時代などの分断国家時代は外部からの圧迫はあったが、直接的な支配を受けることはなかった。ところが統一国家時代の千年間ほとんどが他国の支配を受けていたので「千年属国」とされる。分断国とちがい統一王国はそれを維持するためには巨大な中華の王朝に事大することが欠かせないことになった。これが後に述べる朝鮮らしさの根幹である“事大主義”を生むことになった。936 年に統一を成し遂げた高麗の事大関係を『朝鮮史』でみる。

・後唐から高麗国王の冊封を受け（933 年）それ以後、後晋をはじめ遼・金・元・明の各王朝と冊封関係を結んだ。

・中国皇帝から冊封を受け、その年号を使用することは自国の安全を確保する上で不可欠の措置であった。

『韓国高校歴史』は、元と高麗の事大関係を以下のように記述している。

・元と講和して以降、モンゴルの二度の日本遠征に軍隊と物資の提供を強要され、各地に 3 つの統治機構が置かれ、広い領土を奪われた。

・高麗の王は元の娘と結婚して婿となり、内政干渉機関を置かれ、軍事組織にも影響を受けた。

・高麗の娘を貢女とし、金・銀・麻布・高麗人参・鷹などを徴発し、農民の負担をさらに重くした。

・元の内政干渉と親元派の策動で、政治は正常に運営されなかった。

『恨韓論』では次のように事大のようすを記している。

・高麗から元に送られた宦官が高麗国王にゆすり・たかりを行い。親戚一族 364 人を官職に付けさせたという。

・李氏朝鮮時代には国号まで明から下賜された。北京からの勅使に国王以下文武百官がおののいていた。

・李氏朝鮮末期には、清の直隸総督李鴻章の部下として現地司令官となったのは袁世凱で、当時 20 代であった。

②弱い王権と激しい党派抗争

朝鮮の政治史をみると、弱い王権と激しい党派抗争が際立っている。

分断国家時代に強力な王は、高句麗好太王（広開土王）がきわめてめずらしい事例である。

統一国家の高麗を倒し李氏朝鮮を建国した李成桂でもその権力は不安定であった。統一国家の高麗も李氏朝鮮でも王は有力官僚や氏族から押され共立される事例が多く、時には追放や殺害される事例は珍しくない。その例をあげると・・・

・隋の 200 万の軍勢や唐の名君太宗が遠征しても負けなかった高句麗が、やがて唐と新羅の連合軍に敗れるのは内輪もめ（内訌）であった……『恨韓論』

・歴代新羅国王の半数近い 20 人が非業の死を遂げている……『恨韓論』

・新羅末期の弓裔は、官僚・将軍らを殺害し、弥勒信仰を利用して専制政治をしようとしたが、臣下によって追放された（この後 100 年間武臣政権が続く）……『韓国高校歴史』

・高麗王の毅宗は文臣優遇策などに反発する武臣らにより廃され、巨濟島に流された……『韓国高校歴史』

・高麗末期に近い頃の恭愍王は、権門盛族を押さえ、良民の解放を進め、王権の強化や国家財政の強化などを実現したが、権門盛族によって殺害された……『韓国高校歴史』

・李成桂が革命派は 2 人の王を相次いで廃し、恭讓王を立てたがこれも廃し、高麗を滅亡させて李氏朝鮮を建国した……『韓国高校歴史』

・李氏朝鮮の開祖・李成桂は、高麗の王族など全てを殺す“族滅”をおこなったが、李成桂の王子たちの殺し合い始まり、李成桂自身も出奔生活を送る……『恨韓論』

日本の王は早くから「天皇」を称したが、朝鮮の王は「皇帝」を名乗ることが出来ず、「王」であった。それが、日清戦争の下関条約で、朝鮮の独立が認められ大韓帝王の「皇帝を称することが初めて出来たのである。このことを『恥韓論』は「日本のおかげで夢にまで見た皇帝に」と書いている。しかしこの皇帝は、日露戦争前の状況で、日本を見限りロシアの大使館に逃げ込みロシアに事大したが、結局日本が勝利し、朝鮮併合で「大韓帝国」は、夢と消えた。

金日成から 3 代の正恩まで国家元首が 70 年近く続く北朝鮮は、分裂が必死の朝鮮半島では簡単なことではない……『恨韓論』

党派抗争……

王権が弱体であるのに対し、両班特に科挙選抜を経た文班が大きな権力を持ち、時には皇后の出身氏族（閔族）が発言力を持つこともある。しかしそれらは派閥（朋党）を作り互いに争うことが多く、国政の停滞や大きなふれ・変動を招くことになった。その事例は韓国の高校歴史書をはじめ多くの史書に満ちている。

・隋と唐にも敗れなかった高句麗が、唐・新羅の連合軍に滅ぼされたのは高句麗の内訌が主因とされる。

・16世紀半ば以降士林が政局を主導し、学派を中心に士林が朋党を作り、互いを批判する朋党政治が展開された……『韓国高校歴史』

・17世紀半ばに王や皇后の服喪期間1年か3年かなどを巡る儒官の派閥対立が繰り返され、その儒官派閥も分列と抗争を続け“朋党の争い”として時には4人の大臣と60余人が獄死や刑死した。……『朝鮮史』

・朋党政治の弊害を押さえるため王権を強化しようとしたが、王権が弱く、外戚を中心とする勢道政治が展開し、政治規律が乱れ、民衆への収奪も激しくなり、民衆の抵抗運動も展開された……『韓国高校歴史』

第二次大戦後も党派抗争は続いた、と『恨韓論』は以下の例を書いている。

・建国準備委員会が内ゲバ状態となり臨時政府主席の金九などが暗殺され、アメリカの庇護下にあった李承晩だけが生き残り、大韓民国の初代大統領となった。その後民族派は李承晩によって暗殺し尽くされた。李承晩はその後アメリカへ亡命した。北（朝鮮民主主義共和国）を建国した金日成は社会主義派を一掃した。

③小中華思想と儒教の呪縛

小中華思想……

中国の王朝を「大中華」その下に位置する文明国を「小中華」それ以外を野蛮か「夷狄」と位置づけた。「朝鮮は明の次に中華文明を保持する“小中華”として自らを規定していた。明の滅亡により“小中華”は“中華文明唯一の継承者”へと変化させていった。これは清に対する文化的優越感となって現れるが、現実的には清に君臣の礼に基づく事大関係を結ばねばならない矛盾を抱えてしまう」と『韓国の歴史』は書く。

「中華が父、朝鮮は兄、日本（倭）は弟」「日本の文明は朝鮮がことごとく教えて」という思考になっている。が、清を中華と認めず、親明反清策として明を助け清を攻撃するため「北伐策」もとろうとした。軍事力で敵わないため、朝鮮の国論は清に事大し、従属を強化していった。

儒教＝朱子学の呪縛……

高麗を滅ぼした李氏朝鮮は、高麗の王族を族滅し、「崇儒抑仏」策をとった。高麗の誇る仏教や青磁を徹底的に否定した。「高麗末期の国力の衰退の原因は、仏教が政治と癒着して政治の混乱をもたらしたため、仏教を排斥し、儒学を奨励した」と『韓国の歴史』は書き、青磁より“白磁”が儒学者に好まれたためという。

儒教、中でも朱子学が500年間繰り返し徹底教育された。『反日・韓国』は次のように、朱子学に深く影響を受けた朝鮮・韓国を記している。

- ・精神の深いところで「善は一つしかない」という朱子学の精神が蓄積されてきた。
- ・朝鮮は朱子学の描いたとおりの社会で、朱子学が一番浸透したのが韓国。中国は大きいですが、朝鮮は小さいから中国以上に朱子学が徹底された。
- ・日本の場合、歴史にはいろんな考え方があるから、お互いに主張するばかりでなく、話し合いをして、妥協し、未来へ向かおうと発想する。しかし韓国は、常に「善か悪か」の

2つの軸しかない。すごく朱子学的。善を決めるのは一番偉い人で、昔なら王様。

「嘘つきやホラ吹きでないと生き残れないのが、韓国社会の宿命でさだめ」という『恨韓論』はそのさだめの背景や反日感情を以下のように記している。

- ・嘘つきやホラ吹きの背景にあるのが、中華思想や頑迷な儒教思想。この思想が俗流化し生まれたのが、自己中心、自国中心の思想。たいていの儒教国家は「道德最低、欲望最高」というのが相場。

- ・日本の国学者たちは、形式的な「勸善懲悪」主義にすぎない漢意唐心と、「誠」を基本とする「和意和心」との違いを喝破していた。

- ・韓国ではナショナリズムを育てるため「反日」というイデオロギーを創出し、そのためなら嘘つきやホラ吹きも公然と認知された。「強制連行」「従軍慰安婦」など反日に利用されるものなら大歓迎。

また、儒教の影響の強い韓国人の労働感を『反日・韓国』は次のように記している。

- ・韓国の大学進学率が高いのは就職のためもあるが、「正しい人間は教育によって作られる」という発想もすごく強い。儒教の影響で、いい大学に行くといい人間になれる、と考える。

- ・日本では職人がけっこう評価されるが、中国や韓国では全然ダメ。天と地の差がある。

- ・「汗水流すのは奴隷だ」という感覚が韓国人に強い。「汗水流すのを好む日本人は奴隷の根性だ」となる。日本との関係を政治でも、外交でも、個人でもお金のイメージでしか見ていないので・・・日本人と付き合ってお金を取らないのは馬鹿だと思われる。汗水流すのを好む日本人を賤しいと見做しているので、騙しても罪にならない、そういう感覚がある。

孝・敬老こそが最大の美德という儒教の国・韓国社会で、75歳以上の老人自殺率が先進国の中でも群を抜いて高いと『恥韓論』は次のように書いている。

- ・韓国はIMF管理で、年金は2000年代までほとんどなく、福祉政策がほとんど期待できない。老人自殺率は10万人あたり160.4人（日本は14.6人）でOECD平均の8倍。65～74歳では81.8人（日本は17.9人）。

④世論の凝縮・義兵と一揆

世論……

激昂して火を付ける、焼身自殺する、泣き叫ぶ大勢の人々、大学修学能力試験でのパトカーや白バイによる遅刻者の送り届けや後輩らのすざまじい激励。またセウォール号沈没事件、ナツリターン問題等々・・・これらは我々が韓国のニュースでかなり奇異の目で見ることである。

朝鮮の“義兵”が、弱体な政府軍を支援または軍に代わって外国の侵攻軍を撃退したことは何度もあり、ことが起きそれが認識されると、世論は一つの方向に凝縮し、爆発的なパワーとなって行動する事例が多い。

義兵……

隋に続いて唐から何度も侵略された「高句麗は、国境の諸城を陥落するなどかなりの困

難を経たが、民・軍が協力してついに唐軍を撃退した（645）」と『韓国高校歴史』は記し、特に“民・軍”と先に民を記している点に注目したい。モンゴル・元への民の抵抗、壬申倭乱への義兵の活躍を「自発的に組織された義兵が郷土の地理に明るい利点を活用し、(略)小兵力でも倭軍に大きな打撃を与えた」と記している。19世紀李朝末期の社会変動に立ち上がったのも農民で、それらを押さえたのも両班らを指導者とする義兵であった。(民衆パワーの発揮参照)

外国勢力の侵攻に政府軍が抗し切れないとき、地方の有力者や農民が武器を取り義兵として戦い、外国軍を撤退に追い込んだ例は先に見たように、隋・唐・元・倭（豊臣）などが特筆される。

19世紀になり外国勢力の影響が強まる中で、民衆の不満が政治的要求となり、民衆が一揆や義兵という形で、立ち上がった。

1811年に起きた民衆の反乱（平安道農民反乱）は中央政府打倒を目指すもので、定州城にこもった多数の民衆の鎮圧に4か月を要し、この鎮圧は義兵の平安道の両班や商人の力によるものであった。

1896年の義兵闘争は1月に始まり3月には全国化した。義兵の中心は農民をはじめとする下層大衆であった。各地で親日的な「倭観察使」や「倭郡守」を処断し、日本人官吏や軍人、商人を襲った。この間に高宗がロシア公使館に移る「露館播遷」が起これ、開化派内閣のメンバーらが義兵に処断されたり、日本へ亡命した。……『朝鮮の歴史』

日本の植民地支配を糾弾する三・一運動も民衆や義兵のパワー爆発の一例、と岡崎久彦氏は『隣の国で考えた』に書いている。

法治より人治……

隋の煬帝が和平を条件に引き上げ始めると、高句麗軍が襲いかかった。豊臣軍の撤退時にも同じような事例があった。

モンゴル(元)の激しい攻撃に抗しきれなくなった元宗は、元に入朝し江華島の王城の破壊と降伏を表明した。しかし武臣派は執権者を殺し、王に逆らい降伏せず、10余年もの間抵抗した。王とモンゴル軍により敗北した武臣派は「三別抄」軍としてさらに抵抗を続けた。……『朝鮮の歴史』

ここには、朝鮮では約束は守られず、ウソをつくのは賢い証拠とする風潮、王の権威は弱く、しかも激しい派閥闘争まで示している。

「韓国社会では法がきちんと守られているか」との問いに、77%が「そうじゃない」と答え、42%が「法を守れば損をする」と回答。81%は「有錢無罪、無錢有罪」（お金があれば無罪、お金がなければ有罪）と答え、67%は「ポピュリズム的な、または不当な裁判結果が多い」と、答えている。……『恥韓論』（2011年の聯合ニュース紙を引用）

「韓国に法治主義は最初からない。形は法治国家になった。しかし魂がない。法律があれば法治国家なら、中国だって法律はいくらでもある。日本より多いかも」「韓国は検察も裁判官も大統領の下に置かれ、そのように国が作られている。……『反日・韓国』

日本に関わることでみると、『黒韓史』は、法や条約、歴的事実を無視する韓国人の事例を次のように挙げている。

・日韓併合時代（1910～1945年）をなかったことにしたいので、1948年に成立した大韓民国の憲法には「大韓民国は1919年の三・一運動で建国した」と書かれている。

・「韓日併合条約は強制によるもので無効」と1995年に韓国国会は決議した。しかし韓国が何を主張しようと、朝鮮半島の歴史で併合時代の正統性は消せない存在として刻まれている。

・韓国では「国民感情が法より上にある」とよく言われる。その国民感情は、客観的な根拠に乏しく、感情的な意見に過ぎない。「反対を許さない」という感情の上に成り立ち、やがて「美德」や「道徳」のようになり、「正しさ」を主張する。そして外国、特に日本へも押しつけている。

賄賂などの不正が横行する韓国では、「法の支配」が揺らいでいると『恨韓論』は次のように書いている。

・事後法が横行している韓国では、法制化する以前のケースが追求される「不法無法」で、検事が賄賂を受け取るなどの司法の不正・腐敗は日常茶飯事となっている。

〔Ⅲ〕朝鮮らしさ 連続性・統一性を欠くバラバラな半島国家

日本と比べると、朝鮮は国家としての連続性や統一性を欠き、その一方では両班を頂点とする身分制、高麗末期以降の科挙と儒教が統一国家時代に確立された数少ない連続性・統一性としてあげられる。

《甲》前権力の否定……「日帝」も前権力

「韓国の大統領は亡命、暗殺、自殺、死刑宣告、無期懲役、身内のスキャンダルなど、決まって不幸に見舞われる」……『大統領殺す国』

韓国“建国の父”李承晩は12年間大統領であったが、1960年「四・一九学生革命」がおこり、アメリカへ亡命した。

軍事クーデターで政権を握った朴正熙は、大統領に当選し、北朝鮮との対立を背景に独裁体制をつくり、懸案の日本との国交正常化を図り日韓基本条約を結び、その賠償金で“漢江の奇跡”と言われる経済成長を実現した。批判も強く、大統領暗殺未遂に巻き込まれた夫人が殺害され、その5年後の1979年に暗殺された。後継の軍出身の2人の大統領は、不正蓄財と弾圧事件で死刑判決、無期懲役（ともに後に減刑）と裁かれた。

初の本格的民間出身の金泳三大統領は、次男の金銭スキャンダルとIMF管理などで人気を失い、今なお自宅軟禁状態（2015年11月死去）。

日本から拉致されたことで知られる金大中は、大統領として北朝鮮への「太陽政策」、日本文化の解放などを進めたが、息子3人や親戚の金銭スキャンダルが起こる。次の大統領は退任後不正資金疑惑の中、自殺した。日本で生まれた李明博は、学生時代から反日運動に参加、大企業のサラリーマンから社長に、ソウル市長を経て大統領に当選。経済大統領

の期待があったが、経済も北との関係も改善せず、反日のパフォーマンスで独島上陸や天皇批判などの暴発でより人気を失い、実兄の逮捕、本人の不正資金疑惑で国外渡航禁止措置を受けたままである。

韓国の大統領は任期 5 年で再選はないが、三権を統括するほどの大きな権力を持つ。『大統領殺す国』は、その特徴を以下のように書いている。

- ・大統領と首相に権力を分散させる。日本のように議会制民主主義になどの声もあるが、改革案はことごとく潰された。大統領一人に権力を集中させるシステムのほうが韓国にあっている。

- ・絶対的な権力を一人の人間に与えたことへの反動もある。スキャンダルが起きたときに、大統領をその座からひきおろすエネルギーはすさまじいものになる。

- ・日本では、政権が変わっても公約を引き続き継承する。前任総理を裁いたのはロッキード事件の田中に対する三木首相ぐらいである。しかし、韓国の場合、新任者が前任者の公約を全面否定することから始まる。前任者の公約をそのまま引き継ぐと、自分自身の存在価値がなくなると思っているからだ。大事なことは「前任者とは違う」こと。

「朝鮮半島の国々は、既存の強者を全否定することで、新しい強者のウリ（仲間）となることを選んできた」とする『黒韓史』は以下のことを書いている。

- ・朝鮮半島初の統一国家の高麗の創健者王建は、旧百済の人に権力を与えるなど教訓している。高句麗の領土はほとんど唐に取られている。

- ・高麗を滅ぼした李成桂は、高麗の王一族をことごとく族滅している。明に逆らった高麗を滅亡、王姓の者全ての殺害をはかったのは、自己の正統性を明に示すためであった。

- ・ヤルタ会談で、朝鮮半島の信託統治が決まり、日本から連合軍（米国・ソ連）となり、南は米国軍に、そして 1948 年に大韓民国に統治権が移譲された。しかし韓国は日本の統治権（韓国併合）を違法無効として認めようとせず、日本を否定する“前例のない反日国家”が誕生した。

『恨韓論』は戦後の権力構造に加え、以下のように書いている。「韓国社会には 1000 年以上続いた易姓革命の文化風習がある。易姓革命では、新王朝が旧王朝を根絶する。大統領が退任すると、その不正が一斉に暴かれるのは、1000 年以上続くお家芸なのだ。

《乙》善悪二元思考・・・朱子学の呪縛

善悪二元論は孔子の性善説、孟子の性悪説からきていとされる。対照的なのは仏教の善悪一如で、善でもない悪でもない「無記」があるとする一元論。儒教の中でも朱子学に強く傾倒した李氏朝鮮以降、現代韓国でも「善か悪か」の二元的思考が極めて強いことを各書は、以下のように書いている。

- ・韓国は日本（いろんな考え方があるから、話し合い、妥協し、未来へ向かう）と違って、常に「善か悪か」二つの軸しかない。すごく朱子学的。

- ・韓国で一番偉い人たちがつくった歴史認識は揺るぎがない。それは世界のどの国の人が見ても、絶対的善だ。したがって、その他の考え方は悪であり、排除しなければならない、

と、韓国人一般は考える……以上『反日・韓国』

・韓国民は自己中心的で、絶対的な優越感を持ちたがる。「自分は間違っていない」と考える人からすれば、すべての責任は他人にあることになる。都合の悪いことはすべて他人のせいにするのは、当たり前のこと。

・韓国でもっとも代表的な善は、韓国礼賛の「オリジナル」だろう。反対に代表的な悪は「日本・倭奴」となる。このような善悪二元論が韓国のエトスとなった。悪いことを日本のせいにするのは、すべて済んでしまう……以上『恨韓論』

・韓国は、何事も「二元論的」にしか考えない国です。上か下か、勝ちか負けか、白か黒か……左右（左派・右派）葛藤もその副作用の1つ……『黒韓史』

・「僕は善だから何をしてもいい」「あいつが悪だから、僕は善。だから僕はあいつに何をやってもいい」と考える。

・日本は悪だ。日本を叩け！ お前たちのせいで、輝かしい韓民族の過去が失われた。お前たちが南北統一を邪魔しているのも知っているぞ！ お前たちの先祖なんか全員悪党だ。虐殺者だ。レイプ魔だ！ ……」以上『恥韓論』

《丙》事大主義

高麗は建国後まもなく後梁・後唐など中華の歴代王朝から冊封を受け、中華の年号を使用した。これは自国の安全を保障するため不可欠な措置であった。クーデターで高麗を滅ぼした李成桂が、明に「朝鮮」の国名を決めてもらい、王の玉璽も明から授かった。

「朝鮮半島の統一国家は、歴代中国王朝に事大することでもかろうじてその枠組みを維持してきた」……『恨韓論』

「朝鮮は明に忠誠を尽くしているから、明と関係のない倭（日本）より偉い」とする思想までみられた李氏朝鮮。「強い者に付く」事大主義の朝鮮は、歴史の大きな転換点で大きな失敗を何度もしている。

明が衰退し女真族が勢いを伸ばし朝鮮に同盟を求めてきたとき、明との関係を絶てない朝鮮は“中立”を掲げたが、明へ形ばかりの援軍を出して結局明朝鮮連合軍は敗北。

明国に代わり清国が建国しても、朝鮮は清に従おうとせず、清から攻撃され、朝鮮の王は平民の服を着て“三拝九叩頭”で降伏し、以後清から極めて冷遇された。

日清戦争後、清からの独立を得た大韓帝国皇帝は、日本の支配を嫌い、より巨大なロシアを頼った。その後の日露戦争で日本が勝利し、日韓併合で“朝鮮”国は歴史から消えた。

事大主義的思考は、より大きなより強い国に依拠することで自国での支配権を守ろうとするのであるが、国家関係のみならず、より強い集団、より強い会社、より強い人・・・と、強者の翼に入ろうとする思考である。

朝鮮・韓国のらしさ……国民性と反日

韓国の国民性……

「韓国の人はプライドが高く、協調性が乏しい。手間がかかることはいやがる。自分の考えと違うことは譲らない」。これは筆者の二男（韓国の会社と取引があつてしばしば韓国

に行き、来日した韓国人とも交渉)の体験談。

半万年(5000年)の長い歴史を標榜しながら、各時代に前政権を否定しその文化や足跡をほとんど否定抹消してきた歴史。何よりも半万年の内統一時代が近年の1000年ほどで、その間、中華の王朝に事大することで自己の王権を維持し、近代以降は日本・アメリカ・ソ連・中国の強い影響下に置かれた“被支配者”的屈辱の歴史。その中で、激しい感情が時には対外的義民活動となり、政府・政権を激しく揺るがす運動になり、自国自慢の“ウラナリ”となって噴出する。

元来の身分階層社会が、「上下の身分差」差別を基本とする儒学の浸透で、より強固な身分と序列意識、地域の差別を生み、「白か黒」「自分・自分の会社・我が国・・・が善で、その他は悪」という、善悪二元論の思考が国民の基本的思考となった。競争中心の教育やスポーツは、いい大学に入ること、「勝てばいい」となり、国際大会でも金以外は銀も銅もどうでもいい、となり評価はほとんどしない。

面子を重んじ、二元論の国民性は謙虚さや柔軟性に欠け、あったことをなかったことに、なかったことをあったことに、自己中心に決めつける。その国民性が向かったのは「悪の北」であった。北朝鮮はソ連と中国の傀儡で、憎むべき敵であり、韓国は「反共」に燃えた。しかし、そのエネルギーは「反日」へと向かう。

反日の理由・・・韓国憲法と“日本悪”論

「韓国の場合、新任者が前任者の政策を全面的に否定することから始まる。前任者の政策をそのまま引き継ぐと自分自身の存在価値がなくなると思っている。(略)極端に言えば、前権力と正反対の政策を取ればいい」と、『大統領を殺す国』は書く。

現在の韓国(大韓民国)の前権力は、朝鮮を併合していた日本に他ならない。韓国の人々の反日のもとは、1910年以降の“併合時代”をなかったことにしたい願望が強烈にある。「韓国はもともと反日で生まれた国、反日に終わりはない」と『恥韓論』は以下の点を挙げている。

- ・首相の靖国参拝やめても、竹島抗議やめても反日は止まらない。
- ・慰安婦に謝罪せよ、日本海に東海を併記せよ、旭日旗は戦犯旗だから使用を中止せよ、新しい資料が見つければ賠償を追加せよとか、新しい「反日商品」を開発したりして反日は永遠に終わらない。
- ・1948年8月15日建国の大韓民国の憲法前文は「私たち大韓国民は己未三一(1919年3月1日)運動で大韓民国を建立」と、併合時代をなかったことにして大韓帝国→臨時政府→大韓民国とし、三・一運動の宣言文で臨時政府ができた時点で、大韓民国ができたとしている。

「韓国ではナショナリズムを育てるために、「反日」というイデオロギーを創出しなければならなかった。反日が最優先となり、そのためなら、嘘つきもホラ吹きも認知された。いわゆる「強制連行」「従軍慰安婦」など「反日」のプロパガンダに利用できるものなら大歓迎なのである。たとえ嘘であろうと「国是国策」とされ政府によって鼓舞されるくらい

だ」……『恨韓論』

水産物の輸入禁止措置をした韓国の海洋水産部長官（女性）の発言（2013年9月30日記事）は「日本が汚染水を外に流すとは思わなかった。あのような非人道的なガキどもを相手に（略）早めに輸入禁止措置をやった」……『恥韓論』

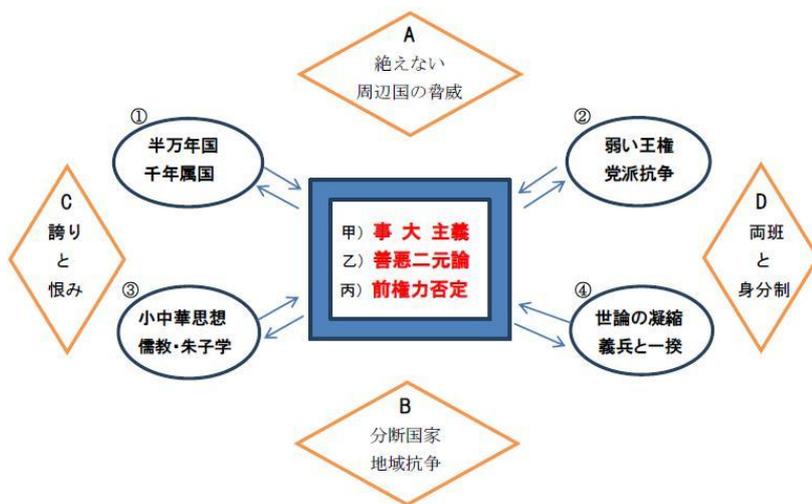
「ガキども」とは日本のことで、ものすごく相手を見下す言い方で、韓国の食品医薬安全処も「データに異常がない」としているのに、データごときが、客観的な資料ごときが反日に勝てるものですか！」「韓国は、世界中で日本を貶めるために死力をつくしています」と、『恥韓論』の著者シンシアリーは強調している。

新しいところでは、『帝国の慰安婦』の著者の女性大学教授が、「慰安婦の強制連行を否定したとしてソウル地検に在宅起訴をされた。読売新聞は日韓関係の専門家の意見として「検察が、反日ナショナリズムが根強い国民感情を意識した面も否定できない。生存する慰安婦たちが韓国社会で『被害者』とみなされていることから、学問の自由も制限できると判断したのではないか」と分析した、と報道している。先の産経新聞ソウル支局長の起訴もまた、（韓国の新聞は訴えられないのに）国民感情から訴えられた。新聞は「韓国民の感情意識か」の見出しを付している。

韓国では、大統領の人氣が落ちると反日姿勢を打ち出すと国民が喝采をする。盧泰愚大統領が日本の歴史認識問題で世論を味方に付け、李明博大統領も政権末期竹島上陸、天皇に土下座要求し人氣回復をはかり、日本に徹底的反韓・嫌韓感情がうまれた。「日本に対して千年後にも恨み続けるだろう」と発言した、現在の朴槿恵大統領は従軍慰安婦をテコに日本を揺さぶり、父朴正熙大統領の親日派のイメージを払拭しようとしている。反日は大統領の政治上の最大テーマとなっている。

日本人観光客に「日本のために韓国の文化財がダメになった」と説明するのが韓国人ガイドの「愛国」だとされる。また、対馬の寺院で盗まれ、韓国へ持ち込まれた仏像・・・韓国から昔盗まれたものだという証拠もないから日本に返還を、という大学教授の声は、反日の声にかき消された。

朝鮮・韓国らしさ・《概念》まとめ



* 図中の①やA、甲などの記号は本文の項目に一致する

《概念》朝鮮・韓国らしさ・・・事大主義・善悪二元論・前権力否定

誇り・プライドは恨みの反動として熟成し①「半万年国」を称し、中華の「千年属国」支配を受ける中で③小中華思想と儒教・朱子学という“独善的”思考に染め上げられて現代に至っている。

朴独裁時代に経済が成長しGDPが日本の10分の1となった21世紀になり、誇りと自信をつけて「反日」が声高になった。

* 「半万年国」を称しながら、神話を脱しきれずしかもその後の歴史資料の多くは権力によって破却されているのは、属国の歴史を直視したくないことや、前権力や前王朝を否定する朝鮮の気風が原因の主なものだろう。「歴史を直視せよ」と日本に迫る韓国が、一番苦手なことが「歴史の直視」ではないか。

朝鮮半島・韓国らしさの政治社会状況は……

②弱い王権とその下での儒学者や門閥の党派抗争が常態化し、B両班上層官僚・武人ら政治や地方支配の実権を持っていた。しかし、政権が弱体で社会的政治的混乱期や外敵に侵略時などに地域の有志や農民が④義民となって戦うなど世論が凝縮することがしばしば見られた。

* 隋や元に立ち向かった義兵は、日韓併合に反対する三・一運動でも立ち上がり、大韓民国憲法の三・一運動に始まる臨時政府に由来し、日韓併合を事実上なかったこととし、その後の「反日」運動の大きな後ろ盾となった。

朝鮮半島では強大な中華の保護で王権を守ろうとする甲) 事大主義が一般的で、李氏朝鮮も明に事大して先の高麗・王氏の族滅をはかり、高麗文化の中核でもある仏教と白磁を排斥し、儒教と青磁を尊重奨励した。結果朱子学の説く身分の上下、地域差など“差別”と乙) “善悪二元論”が広く国民にも浸透した。韓国では今日も儒教精神が中国以上に尊重され、

先に示した《概念》を再掲してまとめてみたい。

朝鮮・韓国のらしさの根底にあるのは……

C 恨み心と誇り・プライドの高さだろう。恨み心はD分断国家で国内対立と地域抗争が絶えず、しかもA絶えない周辺国からの脅威と支配を受けたことで形成され、最後の支配者こそ日本であったことが、現代の強烈な“反日”となっていると考えられる。

北朝鮮の“チュチェ思想”（主体思想）も朱子学の流れにある。丙) 前権力や前王朝の否定は朝鮮半島の特徴であり、韓国での大統領の亡命・暗殺・逮捕・自殺などがそれを良く示している。北朝鮮で3代続いているのは特異だが、鎖国的独裁体制がそれを可能にしている。韓国での前王朝否定の最新型が、「日帝」をやり玉にあげる「反日」である。

終わりに…トゲを1本抜いても 改善主義は独善に勝てない！

「一般の韓国人は反日ではなく、多くは日本に親しみを持っている。一部のマスコミ・メディアや政治家の大きな反日の声が日本に伝えられている」と上手な日本語で語る韓国の大学教授。これに対し、「いま、日本の嫌韓のほうが韓国の反日より強い。韓国の反日感情は庶民レベルでは解消しつつあるが、マスコミ・マスメディアや一部政治家の原理主義的な反日の大きな声は何も言えないでいる」と、元駐韓大使武藤正敏さん。（以上、BS テレビ朝日の「世界は今」2015年11月15日）より聞き書き（文責・坂下）

この番組の主なテーマは安倍首相訪韓と従軍慰安婦問題であった。日本側は「解決済み」との姿勢ながら多少の構想を持ち、妥結したら“蒸し返し”がないことと、妥結に韓国政府の保証と大使館前の慰安婦像の撤去を求めているらしい。韓国政府も大きな声の主体、韓国挺身隊問題対策協議会（挺団協）と折衝し挺団協もいくつか条件を引き下げているという。

韓国側教授は以下のように言った（大意）。

日本政府が謝罪と賠償をすれば、日本が条件としている妥結と同時の慰安婦像の撤去、再び問題にしないという保証は、（妥結の）その後、韓国民が受け入れて実現するので、日本側は条件にしなくてもいい。

11月初めの日韓首脳会談後の漏れてくる情報や、このテレビ番組から日韓の意識のズレ以上に巨大なクレパスを感じざるをえなかった。現在の日韓交渉が3年余も首脳会談が行われず、冷え込んでいる。昨年、拙稿「日本らしさ」で日本らしさの根本は“改善主義”とした。その観点で言えば、安倍首相は改善を図るべく秘密会談までした。が、改善主義は外交では、独善主義に勝てない。さらに加えて大きな声が出て人々が黙らざるをえない韓国憲法の反日・過去の併合支配を認めない規定、戦前の親日派を事後処罰する韓国の事後法、法治より人治の国柄。「悪いのは日本」と中国にすり寄り、国際社会でも主張し続け、「慰安婦が癒やされ、韓国国民が納得する案を」と言うばかりの大統領。先に「早期妥結」という改善主義的動きをした安倍首相。何とか慰安婦で妥結して1つのトゲが抜けても、次に待っているのは“戦時中の徴用工”。人道に反するから「日韓基本条約で解決していない」主張は、韓国で日本企業が次々敗訴していく。次に待っているのは、日韓基本条約の見直し、その究極は日韓併合の謝罪と賠償の見直し。究極は「日韓併合はなかったこと」まで行きかねない。そんな韓国の「自分は善、悪は日本」の独善が止まるとは思えない。北朝鮮は戦後賠償で国を蘇えさせようと、日本を窺っている。

朝鮮・韓国らしさの研究は、隣の国との間の巨大なクレパスの存在、しかもそれが同じ水平にあるのではなく、高低差の大きく違う断層状態のクレパスであることに気づいていなかった私とほとんどの日本人に警鐘を鳴らしている。